2012.3.19

組織的な若手研究者等海外派遣事業　報告書

筑波大学医学群医学類　201011714　山口尚子

〈出張先〉

韓国　忠南大学医学部　小児科・総合診療科

〈期間〉

　　　　2011年8月15日～2011年8月28日(14日間)

〈研究内容〉

　　私は国際系サークルTIMSA(Tsukuba International Medical Students’ Association)の一員としてこの海外派遣事業を知り、海外における臨床実習を行ったり海外の医学生と交流できたりする、またとない機会であると思ったので、この事業への参加を決めた。

　　M2の夏の時点では医学の基礎科目しか習っておらず、臨床科目は未履修であったので、実習内容というよりもそもそも臨床現場がどのようなものであるのか知ることを主な目的とし、また筑波大学での臨床実習が始まった際に今回の経験との比較から、筑波大学の特長や両大学の相違点などを知ることが出来ると思い、忠南大学の学生と共に臨床実習に参加させてもらった。

　　8月15日～28日の2週間の滞在の間、希望の科のうち小児科を1週目に、総合診療科を2週目に回ることとなっていた。単純に現在の段階で興味のある科、というのがこの2つの科を希望として選択した理由であった。

　　科のローテーションの仕方は、3~4人でグループを作り、ある一定期間ずつ科を回るという方法で、これは筑波大学で行っている方法とほぼ同じであると思った。私が希望した上記の2つの科では当時、忠南大学医学部(4年制)の3年生が実習をしており、筑波大学におけるM5と同じ学年の学生と共に実習を行わせてもらった。韓国では通常の4年制大学を卒業したのちに医学部に入学する制度であるため、学生の特徴としては日本の医学生よりも年齢層が高いこと、また多様な専門分野を修了していることなどが挙げられる。修了した専門分野としては、生物学系が多いそうだが、中には英文学や経済学、看護師出身の学生もいて、その点が日本の医学生と大きく異なる点であった。

　　まず一週目に実習を行った小児科では、NICUの見学やASD患者の手術の見学、外来診療の立会、回診の同行などを行わせてもらった。NICUでは35人ほどの新生児や乳児が治療を受けており、教授の回診時以外は基本的に赤ちゃんたちの様子を観察したり、看護師さんがやっていることを観察したりした。赤ちゃんたちの保護者は一日のうちの限られた時間帯のみNICUの扉口まで入ることができ、赤ちゃんを遠目に見ることができたり、看護師に写真を頼めたりする。学生や私のような留学生が赤ちゃんと触れあえる一方、肉親である彼らがやれることがそれだけしかないことに、私はなんとも言えない気持ちを抱いた。

ASD患者の手術の見学・外来診療・回診などにおいては基本的に見学のみを行った。学生の指導や患者さんたちとのコミュニケーションはもちろんほとんどが韓国語で行われたので、そこでは私には視覚的な情報や知識しか得られなかったが、中には英語で説明をしてくれる教授がいたり、英語が堪能な学生もいたりしたので、あとから状況把握を行うことができた。

2週目に回った総合診療科では、朝のカンファレンスへの参加を始め、外来診療の見学、外病院での実習、回診の同行、またプレゼンテーションを行った。外来診療や回診における問診での患者さんとドクター・教授とのやりとりは韓国語で行われたため、その内容を理解することは難しかったが、前もって外来予定の患者さんのリストを下さったので、基本情報はそれから知ることができた。またここでも英語が堪能な学生がいたので、随時英語で説明をしてくれた。総合診療科では学生に身体診察方法のロールプレイングの録画と発表が課せられていたので、その発表課題と当時に私にも｢筑波大学医学部について｣という題でプレゼンテーションが課され、私は筑波大学医学類のカリキュラムや卒後の進路などについてプレゼンテーションを行った。

筑波大学で臨床実習を行うまでまだ1年以上の期間があるが、この経験を忘れずに、実習の際に何かしらの役に立つことを期待したい。

〈感想〉

　　臨床科目を履修した後の海外派遣のほうが、もちろん学べることは多かったと思うが、このような機会でないと臨床実習に出る以前に臨床現場を具体的に体験できることはないので、とても良い経験となった。病院での体験はもちろん、その他の社会的経験や異文化コミュニケーションもとても貴重なものとなった。私や、今回同時に留学した他の筑波大学学生に対して、韓国の学生はとても温かく接してくれ、積極的にコミュニケーションを取ろうとしてくれた学生が多かった。医学面での経験に加え、英語でのコミュニケーション能力の向上にもつながると思うので、この交換留学制度は是非今後も続けてほしいと思う。今のところTIMSAに所属している学生以外がこの制度を知る機会がないので、この制度をもっと多くの人に知ってもらう機会があれば良いなと思う。海外で実習ができる貴重な機会であるので、多くの学生に興味を持ってもらい、積極的に参加して欲しいと思った。

　　この経験を今後の臨床実習に何かしらの形で活かすことはもちろん、忠南大学の医学生を受け入れる際の受け入れ体制にも活かしたいと思う。